

—国道212号交通安全事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

坂手前遺跡

2003

大分県教育委員会

—国道212号交通安全事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

坂手前遺跡

2003

大分県教育委員会

序 文

本書は、県教育委員会が大分県中津土木事務所の依頼を受けて実施した、国道212号交通安全事業に伴う坂手前横穴墓群の発掘調査報告書です。

中津市は大分県の北西端に位置し、国史跡福沢論吉旧居をはじめ、中津城や相原廃寺などの多くの文化財が所在しています。

今回調査した坂手前横穴墓群は、大分県と福岡県の境を流れる山国川沿いにあり、河口から5キロメートル上流の台地北西端の八幡鶴市神社境内に位置しています。発掘調査の結果、弥生時代終末期の土壙墓群や16世紀末まで山城であった坂手隅城址の堀や土塁が発見され、弥生時代から中世にわたる人々の長い営みの跡を明らかにすることができました。

本書が地域の先人の生活を理解する資料として、また、埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成15年3月31日

大分県教育委員会
教育長 石川公一

例 言

1. 本書は、平成13年度に実施された中津市大字和原所在の坂手前遺跡発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は当初、台地上部分の試掘、本調査及び斜面掘削時の立会調査と行われ、遺跡名を周知遺跡である「坂手前横穴墓群」として扱ってきたが、遺構の殆どが台地上の上墳墓群と中世山城跡に限られたため、本遺跡の報告書名を「坂手前遺跡」とした。
3. 発掘調査は、国道212号交通安全事業に伴い、中津土木事務所の委託により大分県教育委員会が実施したものである。また、平成14年度には発掘調査報告書作成に向けての整理作業を行った。
4. 遺構の実測及び写真は文化課職員が行い、空中写真撮影はスカイサーベイに委託し行った。
5. 鉄器の保存処理及び土壌墓内採取の埋土分析を大分県立歴史博物館に依頼し、遺物実測については文化課文化財資料室整理補佐員が行い、トレースは生野令子が行った。
6. 遺跡出土遺物並びに遺構・遺物の実測図は大分県教育委員会文化課文化財資料室に保管している。
7. 本書の執筆、編集は井川泰成が行った。

目 次

第I章 はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査団の構成	1
第II章 地理的歴史的環境	1～2
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1～2
第III章 調査の成果	4～20
1 調査の概要	4
2 遺構と遺物	4～19
第IV章 まとめ	20
写真図版	21～24
附章 坂手前遺跡出土赤色顔料の分析	25～26
縄張りから見た坂手隈城	27

第I章 はじめに

1 調査にいたる経緯

中津市大字和原に所在する坂手前遺跡の発掘調査は、国道212号交通安全事業に伴う、事前の緊急発掘調査として実施された。平成10年度初めに県土木建築部から他の事業とともに分布調査依頼が県教育委員会文化課にあり、県文化課は分布調査を行い、本工区が遺跡存在の可能性が非常に高いため事前の試掘調査が必要な地区と回答した。これを受けて県事業担当部局の中津土木事務所は、用地買収などの条件整備の整った対象地区ごとに試掘調査の依頼を県文化課に行い、県文化課が平成13年6月に試掘調査を実施した。試掘調査は八幡鶴市神社の境内の一部を含む雑木林の樹木伐採後、対象地区用地に重機でトレンチを入れるかたちで行ない、その結果遺構を確認したため、本調査が必要との所見を得た。

本調査は、1次調査を平成13年7月24日～平成13年9月21日まで、2次調査は平成13年12月17日～平成14年2月15日までの計4ヶ月間行った。

2 調査団の構成

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育委員会教育長	石川公一
	文化課長	工藤正徳
	参事兼課長補佐	麻生祐治
	同	清水宗昭
	主 幹	高橋信武
	副主幹	栗原 眞
	同	小柳和宏
	主 査	井川泰成
	嘱 託	東保春奈
	同	細川 愛
	同	遠部 慎

第II章 地理的歴史的環境

大分県北部に位置する中津市は北を周防灘に面し、東は宇佐市、南は下毛郡三光村、西に福岡県築上郡吉富村大平村に接している。人口69013人、面積5567km²、福岡県との県境をなす一級河川の山国川が西を北上し、周防灘へ注いでいる。沖積作用により沖代平野や河口部には三角州が形成されている。また、市の南部には標高30mほどの通称「下毛原丘陵」が広がっていて、坂手前遺跡はこの丘陵上の西北の先端部に所在する。

人々は古くから市内を流れる河川沿いや台地上などに遺跡を残している。旧石器時代の遺跡は少ないが、上ノ原遺跡では細石刃や剥片が出し、縄文時代になると、植野貝塚、犬丸川流域の椀塚遺跡や集落と貝塚で構成された入垣貝塚が代表的で、黒水遺跡や横遺跡では後期の陥とし穴や住居跡が見つかっている。上ノ原平原遺跡では石炭が出し、山国川右岸自然堤防上にある佐知遺跡では竪穴住居が見つかっている。時期としてはいずれも縄文後期の遺跡である。

弥生時代になると遺跡の範囲は拡大していき、台地上の集落や沖積平野の低地に足跡をたどることができる。中期には上ノ原平原遺跡や標高60mの尾根上に展開する森山遺跡は集落遺跡として注目される。また後期には山国川の自然堤防上には佐知遺跡があり、対岸の大平村下唐原郷ヶ原遺跡、

上・唐原遺跡など大規模な集落が形成され古墳時代へと続くものもある。これら集落に対応する集団墓として三光村諫山遺跡B・C地区や岡崎遺跡は石蓋土壇墓群が検出され、勘助野地遺跡では方形墳墓群や土壇墓群が発見され埋葬について特定個人と、集団との関係を示す資料として注目される。

また山国川沿いの古墳・横穴墓の主なものとしては5～6世紀の水添1号墳や相原古墳、上ノ原稲荷塚古墳などが丘陵上に造営され、8～9世紀にかけての勘助野地火葬墓群、幣旗邸古墳と続く。横穴墓としては上ノ原横穴墓群が代表で5世紀後半～8世紀にかけて大きく4時期の及ぶ造墓活動が認められる。

律令時代の遺跡としては相原廃寺や周辺の三口遺跡がある。沖代平野の桑里水田から収穫された米を収納する下毛郡の郡衙に付属した正倉と目される長者屋敷遺跡などがあげられる。

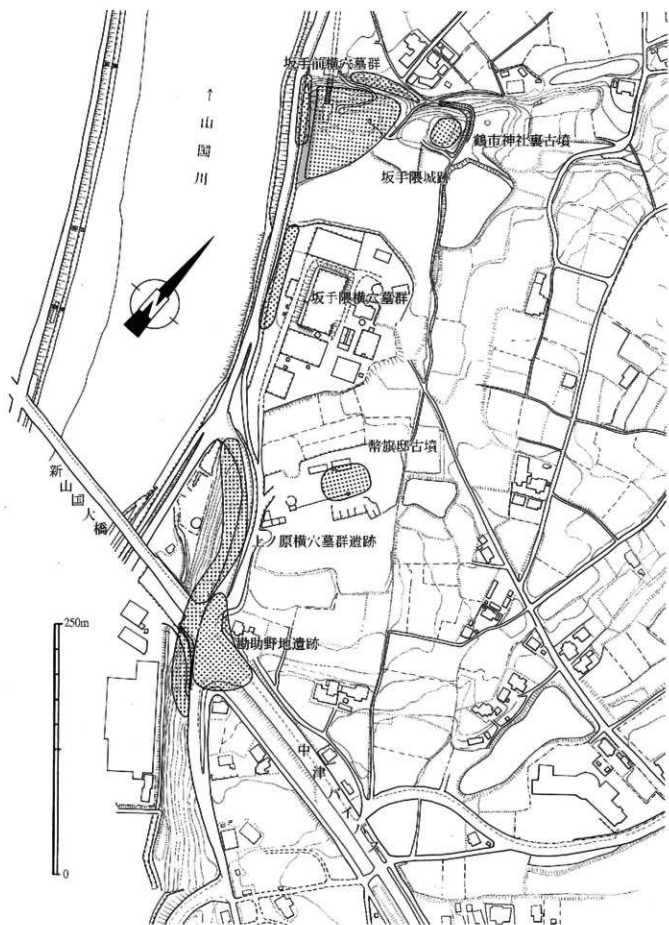
中世になると丘陵上やその縁辺部、平地にも在地の有力者層が堀や土塁を伴った城館を築くようになる。坂手隈城の位置した場所も沖代平野を望む交通の要衝である。中世末期まで文書等でこの地方の諸将の活動の様子がうかがえるが、特に大友氏が耳川の合戦で島津軍に敗れ、勢いが薄れかけてくると豊前の諸将は一齐に反旗を翻し大友の兵を挙げ豊前の大友系の諸城を攻撃する。宇都宮一族の野仲氏は藍原氏の坂手隈城を手始めに成恒氏田嶋崎城（三光村）、豊前の大友最大の拠点だった加来氏の大畑城（中津市）を相次いで攻撃した。しかしこれら城館も黒田氏の入部とともに破却衰退の途をたどる。

参考文献 『日本城郭大系 第16巻 大分・宮崎・愛媛』1980年 新人物往來社
『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』1988年 大分県教育委員会



第1図 坂手前遺跡周辺遺跡分布図

1. 穴ヶ葉山遺跡 2. 金屋塚遺跡 3. 郷ヶ原遺跡 4. 上唐原遺跡 5. 三口遺跡 6. 相原廃寺 7. 坂手前横穴墓群
8. 坂手隈横穴墓群 9. 上ノ原横穴墓群 10. 坂手前遺跡（坂手隈城跡） 11. 相原古墳 12. 幣旗邸古墳
13. 勘助野地遺跡 14. 上ノ原平原遺跡 15. 岡崎遺跡 16. 佐知遺跡 17. 長者原敷遺跡 18. 諫山遺跡B・C地点
19. 横遺跡 20. 大畑城跡 21. 黒水遺跡 22. 成恒城跡 23. ボウガキ遺跡 24. 入垣遺跡



第2図 坂手前横穴墓群周辺地形図 (1/3600)

第三章 調査の成果

1 調査の概要

坂手前遺跡は中津市大字相原に所在し、山国川右岸の標高32~37m余りの洪積台地上に位置する。遺跡は国道212号交通安全事業に伴う試掘調査で弥生終末~古墳時代初頭と中世の二時代の遺構が確認された。

今回設定された調査区(第4図)は、約500m²ほどの面積で、山国川や福岡県大平村を見下ろす洪積台地上にあり、八幡鶴市神社の境内となつて現況は雑木林であったが、古くからの社殿建築や境内整備などにより地山が殆ど露出しており墓材とみられる板状の石材片が散乱している状態だった。

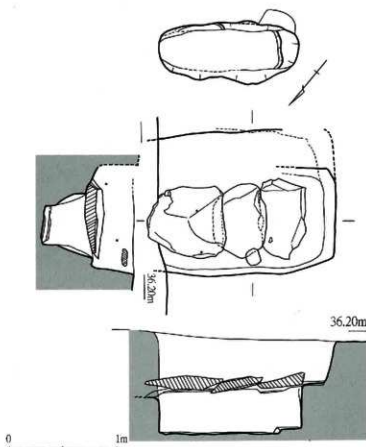
工事予定地の地形は3つの平場からなり、北から南へ向かい段落ちになっている。それぞれ第1・第2・第3平場とした。わずかに残る表土を剥いだ結果、現地表面より20~40cm下で遺構を確認することができ、第1平場では溝状遺構と土壇墓群、第2平場は土壇墓、溝状遺構、敷石遺構等を、第3平場では堀とみられる溝状遺構とピット群などを検出した。

又、第1平場~第2平場の本調査終了後に工事による掘削時の立会調査期間中に横穴墓の奥壁の残存部を発見した。奥壁側からの掘削で見つかり残存度は奥壁から50cm呈で残りは削平され、のり面工事によりコンクリートで塞がれている状態であり、横穴は西方向に開口していたと思われる置物はなかった。

2 遺構と遺物

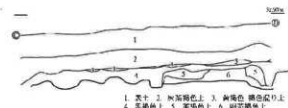
弥生時代の遺構

(1) 石蓋土壇墓

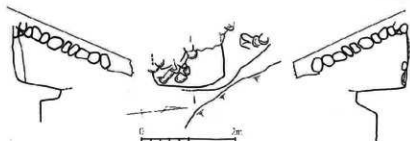


第3図 1号石蓋土壇墓実測図(1/30)

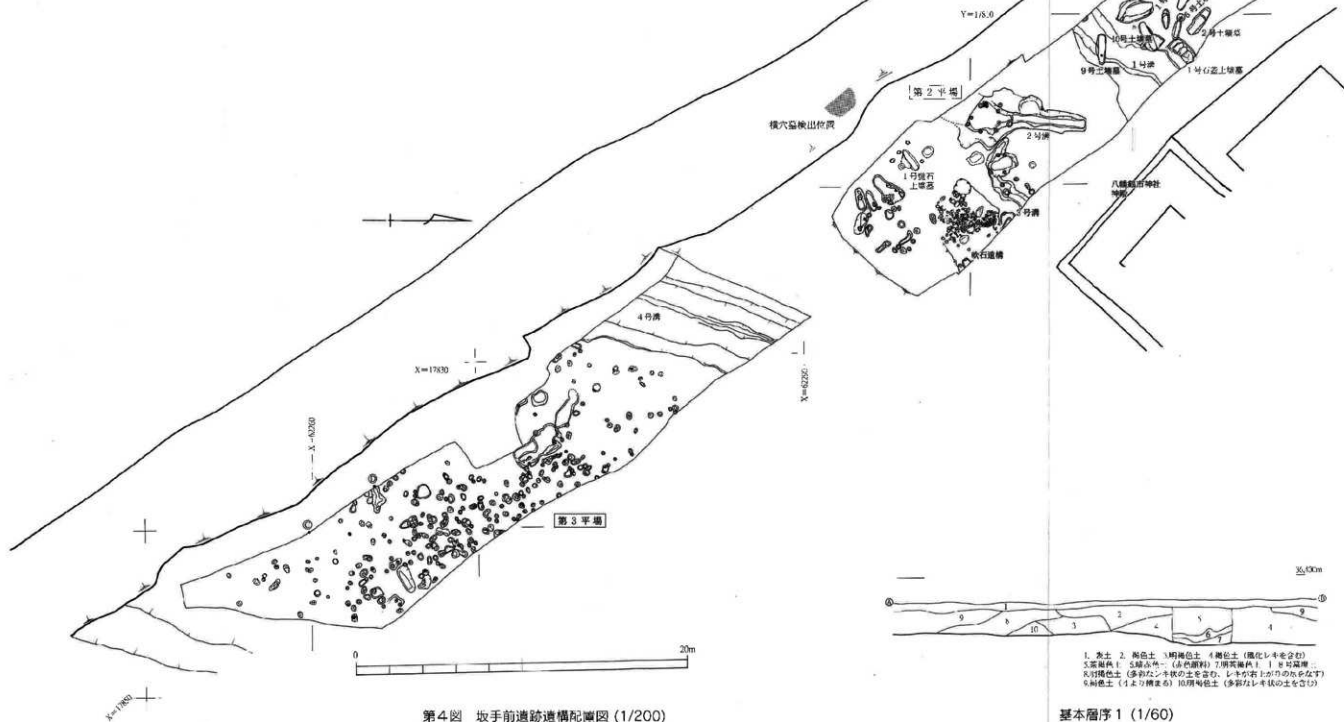
周溝とほぼ平行に隣接して位置し、周溝を切る。主軸はE-34°-Nの二段掘りの石蓋土壇墓である。長辺165cm+ α 、短辺95cm+ α 、深さ40cmを測る。石蓋は長さ55cm、幅70cm平均の安山岩製の割石を



基本層序2 (1/60)



横穴墓実測図 (1/80)



第4図 坂手前遺跡遺構配座図 (1/200)

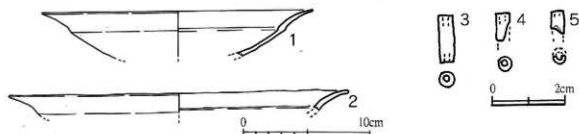
基本層序1 (1/60)

- 1. 赤土
- 2. 褐色土
- 3. 褐色土 (黒化レキを含む)
- 4. 赤褐色土
- 5. 緑土 (赤褐色)
- 6. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 7. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 8. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 9. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 10. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 11. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 12. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 13. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 14. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 15. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 16. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 17. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 18. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 19. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 20. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 21. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 22. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 23. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 24. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 25. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 26. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 27. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 28. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 29. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 30. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 31. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 32. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 33. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 34. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 35. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 36. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 37. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 38. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 39. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 40. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 41. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 42. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 43. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 44. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 45. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 46. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 47. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 48. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 49. 赤褐色土 (多量なレキを含む)
- 50. 赤褐色土 (多量なレキを含む)

南西側から順番に3枚重ね合わせたいわゆる鉛重ねのものである。石重ねの順は、土壇の形状から頭部から覆うように重ねていったものである。板石の裏側には赤色顔料を塗布している。蓋石除去後の土壇の形態は、ややふくらみをもった隅丸長方形で、頭位は南西方向である。

土壇上面では長さ135cm、幅59cm、深さ45cmを測り、内法は長さ132cm、幅37cmである。凶化可能な遺物は管玉3点と高坏片2点で、管玉は棺内部から高坏は石蓋の上部から検出された。

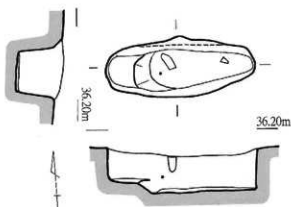
1、2は高坏の口縁部片で石蓋の直上で出土した。2点ともやや内碗気味に立ち上がり屈曲し外反しながら広がる。3～4は副葬品の管玉である。3は長さ1.25cm外径は0.35cmで内径は0.15cmの緑がかった灰色のグリーンタフと呼ばれる装飾品である。



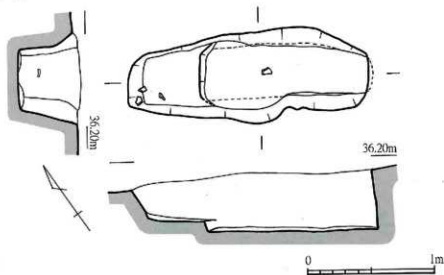
第5図 石蓋土壇墓出土遺物(1/3)

(2) 上墳墓

6図-1

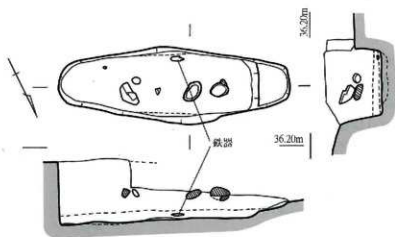


6図-2

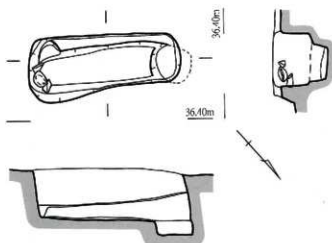


第6図 1号・2号土壇墓(1/30)

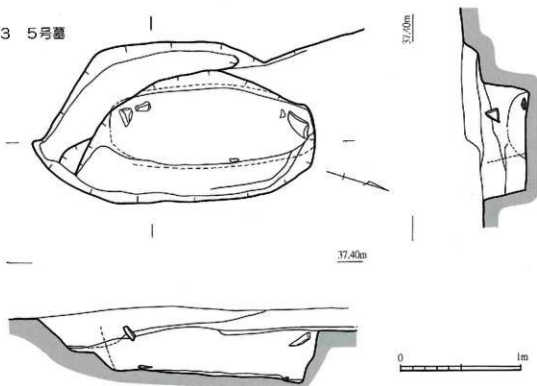
7图-1 3号墓



7图-2 4号墓

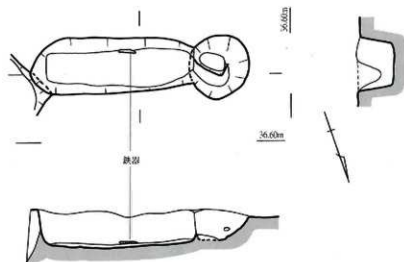


7图-3 5号墓

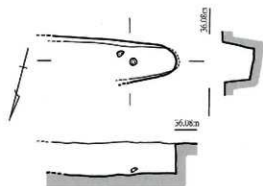


第7图 3·4·5号土圹墓(1/30)

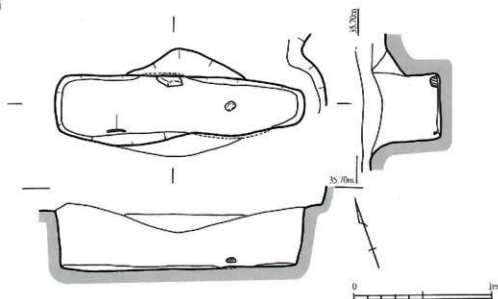
第8图-1 6号墓



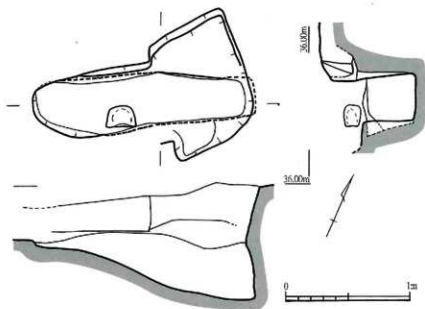
第8图-2 8号墓



第8图-3 9号墓



第8图 6·8号·9号土坑墓(1/30)



第9図 10号土墳墓(1/30)

1号土墳墓 (第6図-1) 一連の土墳墓群のほぼ中央に位置し、2・5・6・10号墓に囲まれている。主軸は、W-8° -Nである。内法は長さ127cm、幅40cm、深さ30cmで、土墳墓群の中では最小である。床面には赤色顔料が施されており、棺の作りや枕位置から頭位は西であったと考えられる。副葬品として管玉が1点(第10図-6)出土している。

2号土墳墓 (第6図-2) 1号墓の北側に位置し、主軸はW-48° -Nの素掘りの土墳墓である。内法は長さ191cm、幅41cm、深さ45cmを測る。頭位は北西で、床全面赤色顔料が塗布されており、土墳墓群のなかでは大型の類に入る。

3号土墳墓 (第7図-1) 1~10号土墳墓とともに一群を形成する。6号墓の西隣に位置し、主軸W-24° -Nで頭位は西に近い素掘りの土墳墓で枕がつくられている。内法は長さ192cm、幅50cm、深さ42cm。床面には赤色顔料が塗布されている。副葬品として床面近くで鉄族(第10図-7)1点を確認した。

4号土墳墓 (第7図-2) 3号墓の北西隣に位置する。主軸はW-35° -Nで棺の形態から頭位は西方向であると考えられる。内法は長さ125cm、幅44cm、深さ39cmの隅丸長方形を呈する。

5号土墳墓 (第7図-3) 1号墓の北60cmのところ付近に近接して位置する。主軸はS-18° -Eで他の土墳墓とは向きを異にする。頭位は南よりである。土墳の直上又は周辺の攪乱が激しく、一部墓壇ラインが欠失している。赤色顔料の塗布が床面一面に施されている。内法は長さ170cm、幅70cm、深さ36cmである。

6号土墳墓 (第8図-1) 1~3号墓と石蓋土墳墓に囲まれるように位置する。小口東側と西側はそれぞれ石蓋土墳とピットに切られる。主軸はW-15° -Nで頭位も棺の形態から西向きと考えられる。土壇は隅丸長方形と思われ、床面には赤色顔料を塗布し、その中から鉄器(第10図-8)が1点出土した。内法は幅41cm、深さ37cmを測る。

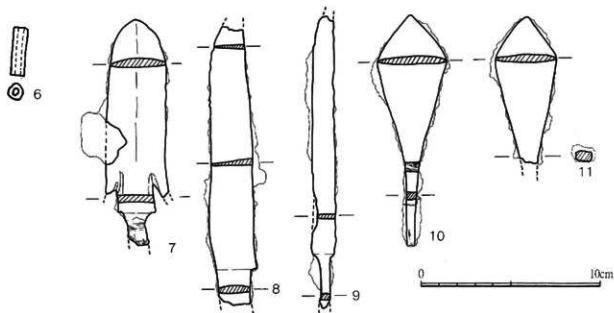
8号土墳墓 (第8図-2) 調査区西壁で検出された。表土剥ぎ時に頭位側が削平され失われ、足位側およそ半分が残った。検出された土墳墓群の中では最も高い位置に存在する。主軸はE-9° -N。頭位は残された形状から東向きと推測される。床面には赤色顔料が塗布されている。

9号土墳墓 (第8図-3)

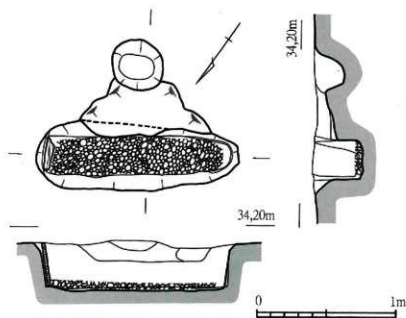
周溝を切る形で溝の中より検出された土墳墓で、5号墓の東1.5mで検出された。主軸はW-19° -Nで頭位も枕はないが棺の形態より西向きと考えられる。内法は長さ181cm、幅47cm、深さ50cmであ

る。赤色顔料の塗布が他の土壙墓同様に床一面にみられる。刀子（第10図-9）が出土している。
 10号土壙墓（第9図）1号墓と周溝の間で検出された地山に斜めに掘り込まれた土壙墓である。主軸はW-22° -N。西側小口と東側小口の高低差が約50cmで、傾斜が大きい。頭位は西向きと考えられる。頭位側小口壁は攪乱により失われ、5cmほど残るのみである。東側は方形遺構を切るように掘られており、方形遺構面から50cm下で土壙上面を検出した。内法は長さ185cm、幅50cm、深さ50cmで床面全面に赤色顔料が施されている。遺物は副葬品として鉄鍔（第10図-10,11）が出土している。

(3) 出土遺物



第10図 土壙墓出土管玉及び鉄器実測図 (1/1・1/2)



第11図 1号壁石土壙墓(1/30)

6は管玉である。長さ1.25cm孔径1.5mmを測る。7～11は鉄器である。7は鉄鍔で刀部長9.2cm、刀幅2.8cm、刀部厚0.7cmで逆しをもち茎部に木質が残る。8は刀子で先端をわずかに欠く。刀部11.5cm、刀幅2.0cm、刀部厚0.3cmである。9は鉄鍔で刀部長11.3cm、刀幅1.1cm、刀部厚0.3cmの細身の資料である。10、11も鉄鍔で幅広の木の葉型である。刀部長6.9cm、刀部幅3.3cm厚さ0.3cm、茎部に樹根皮巻が残り、木質も残存する。

(4) 壁石土壙墓（第11図）

鶴市神社神殿横の10基の上壙

墓群とは様相が異なり、距離をおいて第2平場に1基のみ存在する。

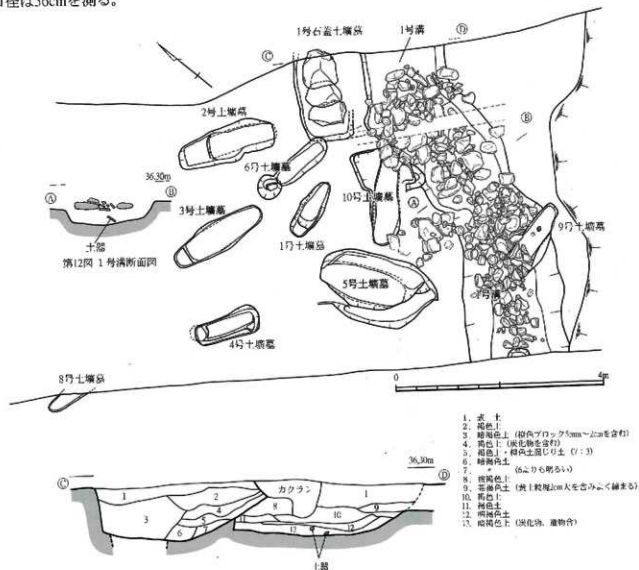
頭位と思われる小口壁に高さ33cm、幅23cm、厚さ2.5cmの板状の壁石をはめ込んでいる。また、床には1~5cm程度の玉砂利をしきつめており、特に頭位側に厚く高く敷かれている。側壁には壁石を差し込んだ痕跡は無いものの北壁の一部には地山の自然石を掘り割って削り、壁面の一部として利用している。遺物はなく第一平場の土壌葬群に比べ赤色顔料と思われる明らかな塗布みられない。主軸はE-34-Nで内法は長さ130cm、幅28cm、深さは34cmである。

(5) 1号溝状遺構

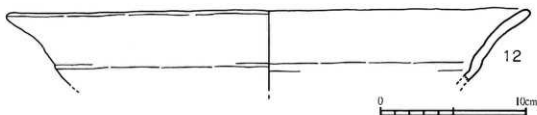
土壌葬域を画するように東西に延びる溝状遺構である。幅1.6m、深さは0.4mで長さは調査区を横断する6.5mである。遺構の時期的な関係は10号土壌墓は方形遺構の下に潜り込むように斜めに傾き、方形遺構に墓坑上部が切られていることから方形遺構よりも古いと考えられる。方形遺構は1号溝より新しい関係にあり、1号石蓋土壌墓と9号土壌墓も溝を切っている。さらに1号石蓋土壌墓は1号土壌墓に切られている。

これらのことから1号石蓋土壌墓、1号及び9号土壌墓は1号溝成立後に造られたといえる。

1号溝出土遺物はいずれも破片であり、数量もわずかであった。第14図は高坏の口縁部である。口径は36cmを測る。



第13図 1号溝及び1号石蓋土壌墓土層図(1/40)



第14図 1号溝出土遺物実測図(1/3)

土壙墓観察表

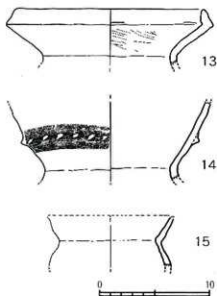
No	分類	主軸 (頭位方位)	土壙の規模 (cm)			石材の利用		副葬品	備考
			長	幅	深	蓋	壁		
1	石蓋土壙墓	E 40° N	130 (155- α)	48 (195- α)	45	○	管玉 3	銅重ね(3枚)、右蓋の裏に赤色顔料塗布	
1	土壙墓	W 8° N	127	40	30		管玉 1		
2	土壙墓	N 52° W	191	41	45				
3	土壙墓	W 24° N	192	50	42		鉄鏃		
4	土壙墓	W 35° N	125	44	39				
5	土壙墓	S 18° E	170	70	36				
6	土壙墓	W 15° N	116+ α	40	37		刀子		
8	土壙墓	W 9° S	90- α	29+ α	25+ α				
9	土壙墓	W 19° N	181	47	50		鉄鏃		
10	土壙墓	W 22° N	184	50	50		鉄鏃 2	床面は主軸方向に大きく傾く	
1	壁石土壙墓	E 34° N	145	45	34	△		床砂利をしく 頭位上部に壁石、側壁に一部自然石を削った跡あり。	

(5) 2号溝 (第4図)

土壙墓群のある調査区最高地点から1mほど低い第2平場に位置し、東側壁からでて北へ回るように展開する遺構である。検出面で幅70cm、深さは最大で22cmである。

遺物は複合口縁をもつ壺片と小型甕の口縁部片などが出土している。(第15図)

13、14は複合口縁壺で13は短くくの字に立ち上がり、口径は16.7cmである。外側はナデ、内側はハケ目調整を施す。14は刻み日突帯を有す。15は小型の甕である。内外ともナデ調整で薄手で焼成はやや脆弱である。



第15図 2号溝出土遺物実測図(1/3)

中世の遺構

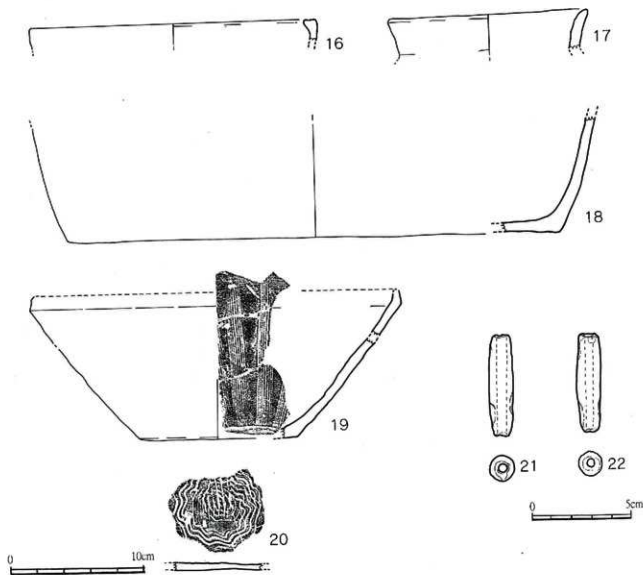
本調査区は坂手隈城の縄張り内と考えられ、周辺には上畧や堀状の遺構が残り、調査の過程で中世の遺物を伴う遺構をいくつか検出した。中堀と考えられる溝状遺構が2条をはじめ、石を敷き詰めた遺構や土坑などである。今回の調査では、南側の土塁は調査の対象外であった。

(1) 3号溝 (第4図)

10基の土壇墓群が検出された鶴市神社拝殿横の第1平場と1m低い第2平場を区画するように50~60cm程度第2平場側を掘り下げ、比高差を大きくしている。検出面で幅は最大2m、長さは調査区を斜めに横断するように約6mにわたりのび調査区外に続くと考えられる。

出土遺物

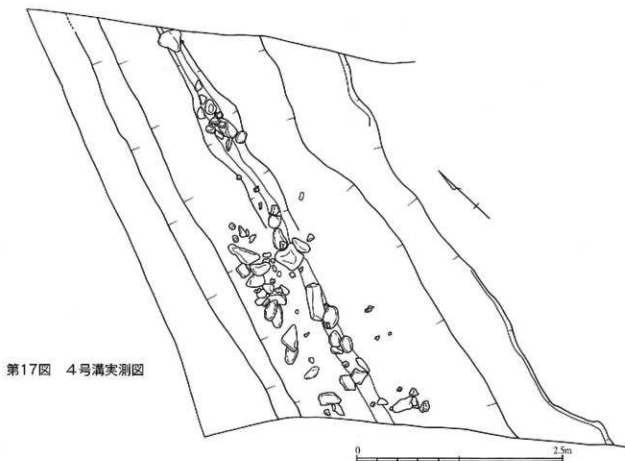
16,17は鉢の口縁部である。いずれも瓦質で16は21.6cm、17は15cmを測る。18は瓦質火鉢の底部である。19,20は播り鉢で19は播り目が9本、放射状にのびる。20は花形文の播り目を見込みに施す瓦質播り鉢で、宇佐、中津地方で産する在地系の資料である。21,22は管状土鏝で遺構に伴うもののみ図化することにした。完形で長さ5cm、孔径は最小で21は0.3cm、22は0.45cmである。



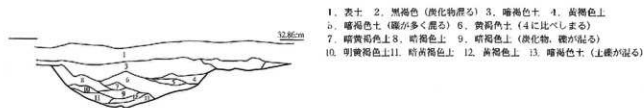
第16図 3号溝出土遺物実測図 (1/3)

(2) 4号溝

第3平場北端に第2平場との比高差を大きくとるように南北方向に掘られている。遺構は、検出面で幅3.5m、長さ8mを測り、深さ1.2mの菜研堀の様相を呈している。遺構は、鶴市神社神殿裏から緩やかに下るように掘られ調査区内を斜めに横断し、本来山国川方向へ向かって延びていくと考えられる。



第17図 4号溝実測図

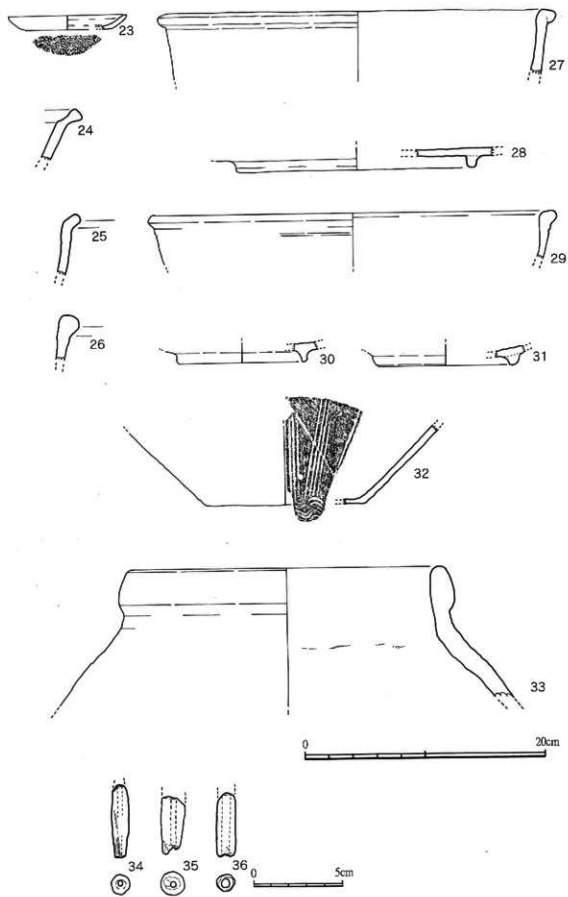


1. 表土 2. 黒褐色(炭化物産る) 3. 暗褐色土 4. 黄褐色土
5. 暗褐色土(腐が多く産る) 6. 黄褐色土(4に比べしる)
7. 暗黄褐色土 8. 暗褐色土 9. 暗褐色土(炭化物、糠が混る)
10. 明黄褐色土 11. 暗黄褐色土 12. 黄褐色土 13. 暗褐色土(土塊が混る)

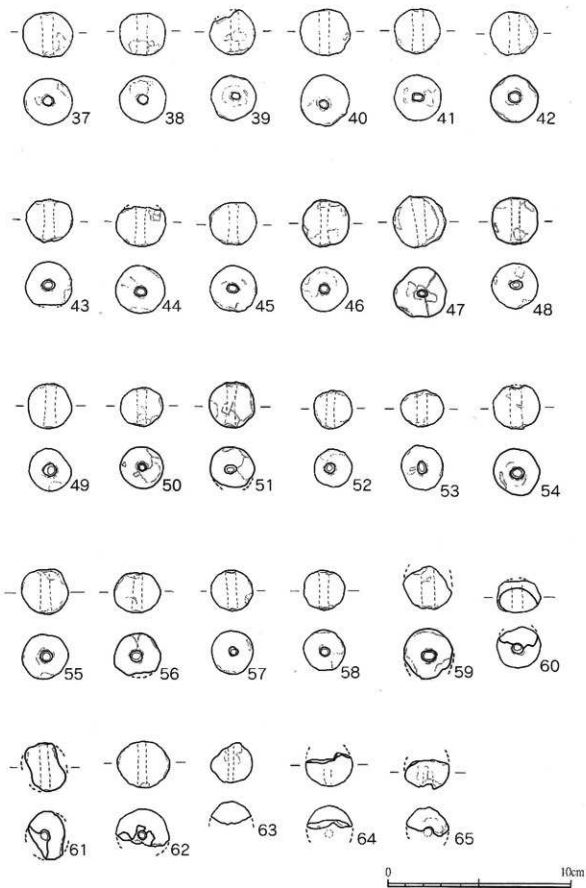
第18図 4号溝土層断面図(1/40)

出土遺物

23は土師皿である。24~32は鉢である。24は土鍋。27,28は土師質の深鉢の同一個体である。口径33cm、底径20cmを測る。29は口径34cm、30,31は底部である。32は播り鉢で、底径は13.4cm外側はケズリ後ナデ、内面ナデ調整をなす。播り目は4本。在地系の播り鉢である。33は備前焼の甕である。口径26.6cm、頸部径27.6cmの下縁口縁をもちややなで肩状を呈する。口縁部には沈線はない。色調は内外面とも暗赤褐色。焼きはよく締まり自然釉がかかる。34,35,36は管状土錘である。



第19图 4号溝出土遺物実測図1 (1/3)



第20图 4号溝出土遺物2 (1/2)

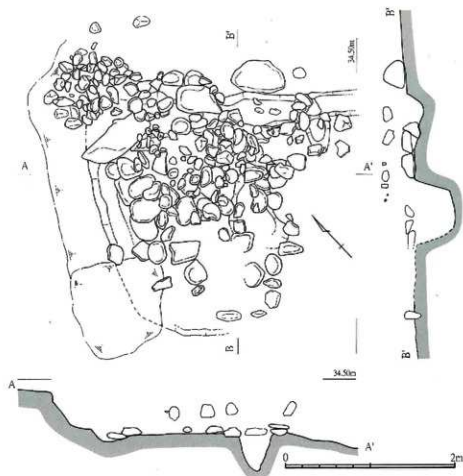
出土地点	形式	残存度	最大長 cm	最大幅 cm	孔径 cm	重さ g	焼成	色調	
21	3号溝	管状土鉢	完形	4.9	1.2	0.4~0.3	7.1	良好	淡黄灰色
22	3号溝	管状土鉢	完形	5.05	1.15	0.45	6.3	良好	淡黄灰色
34	4号溝	管状土鉢	4/5残存	4	1.05	0.3~0.25	2.8	良好	淡灰褐色
35	4号溝	管状土鉢	1/5残存	3.5	1.05	0.5~0.45	3.2	やや良好	黄褐色
36	4号溝	管状土鉢	2/3残存	3.15	1.25	0.3	5.4	良好	淡黄灰色
37	4号溝	球状土鉢	完形	2.4	2.6	0.7~0.6	12.9	良好	黒灰色
38	4号溝	球状土鉢	完形	2.2	1.3	0.25~0.22	12.5	良好	黒灰色
39	4号溝	球状土鉢	一部欠損	2.4	1.3	0.45~0.4	10.9	良好	黒灰色
40	4号溝	球状土鉢	完形	2.5	1.2	0.5~0.45	15.4	良好	黒灰色
41	4号溝	球状土鉢	完形	2.4	1.2	0.65~0.35	12.6	良好	黒灰色
42	4号溝	球状土鉢	一部欠損	2.35	1.15	0.7~0.6	11.9	良好	黒灰色
43	4号溝	球状土鉢	一部欠損	2.3	1.35	0.65~0.6	10.7	良好	黒灰色
44	4号溝	球状土鉢	一部欠損(2.2)	1.0	0.6~0.5	1.10	良好	黒灰色	
45	4号溝	球状土鉢	一部欠損(2.3)	1.15	0.6~0.45	1.18	良好	黒灰色	
46	4号溝	球状土鉢	ほぼ完形	2.55	1.1	0.6~0.5	12.2	良好	黒灰色
47	4号溝	球状土鉢	一部欠損	2.7	1.3	0.75~0.4	16.2	良好	黒灰色
48	4号溝	球状土鉢	ほぼ完形	2.5	1.3	0.7~0.5	12.7	良好	黒灰色
49	4号溝	球状土鉢	一部欠損	2.3	1.15	0.7~0.55	9.7	良好	黒灰色
50	4号溝	球状土鉢	完形	2	1.0	0.5~0.4	8.5	良好	黒灰色
51	4号溝	球状土鉢	一部欠損	2.4	2.5	0.6~0.45	10.0	良好	黒灰色
52	4号溝	球状土鉢	完形	2.05	2.1	0.65~0.6	6.9	良好	黒灰色
53	4号溝	球状土鉢	一部欠損(2.0)	1.9	0.7~0.5	7.9	良好	黒灰色	
54	4号溝	球状土鉢	ほぼ完形(2.3)	2.5	0.7~0.6	11.3	良好	黒灰色	
55	4号溝	球状土鉢	完形	2.4	2.4	0.6~0.55	11.3	良好	黒灰色
56	4号溝	球状土鉢	ほぼ完形	2.1	2.5	0.65~0.6	9.9	良好	黒灰色
57	4号溝	球状土鉢	完形	2.2	2.2	0.5~0.4	9.0	良好	黒灰色
58	4号溝	球状土鉢	完形	2.1	2.2	0.5~0.55	4.2	良好	黒灰色
59	4号溝	球状土鉢	3/4残存(2.3)	2.6	0.75~0.6	7.3	良好	黒灰色	
60	4号溝	球状土鉢	1/2残存(1.7)	2.4	0.6~0.55	6.4	良好	黒灰色	
61	4号溝	球状土鉢	3/4残存	—	—	0.6~0.5	10.2	良好	黒灰色
62	4号溝	球状土鉢	1/2残存	—	—	0.45~0.4	10.0	良好	黒灰色
63	4号溝	球状土鉢	1/3残存	—	—	—	3.7	良好	黒灰色
64	4号溝	球状土鉢	1/3残存	—	—	—	3.7	良好	黒灰色
65	4号溝	球状土鉢	1/4残存	—	—	—	3.4	良好	黒灰色

(3) 敷石遺構

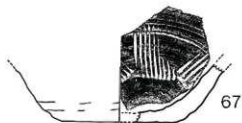
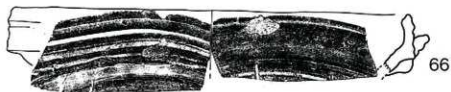
第2平場の東側に位置し、竪大から30cm大の川原石が集積し更に下には扁平な40cmほどの石が方形に敷かれた痕跡がうかがえる遺構である。木の根による攪乱を受け遺構の半分ははっきりしないものの、集石の範囲は約2m四方と推測され、下層の敷石にはそれを囲むように北側と東側で幅30cm、深さ15cm程度の溝を伴う。遺構の周囲を巡っていた可能性もある。

遺物は、掘り鉢や、土鍋などの生活雑器の破片である。66,67は備前焼の掘り鉢の同一個体である。口径は32.8cmを測り、外面灰褐色、内面明茶褐色を呈する。掘り目は9本で放射状に広がると思われる。口縁部形状や、胎土に酸化赤色粒が多く残ることから、16世紀終わりから17世紀初めの焼き締めの短い生産サイクルに入る時期のものとみられる。68,69は土鍋の口縁部である。

くの子に折れ開く特徴がある。



第21図 敷石遺構実測図



第22図 敷石遺構出土遺物実測図 (1/3)

第IV章 まとめ

以上みてきたとおり今回の工事に係る調査区では、天場の土壌墓群と後に拓かれた中世の坂手隈城址の2つに分けられる。

土壌墓群について 計11基確認された内10基が周溝とみられる溝に区画され、その内側もしくは溝中に存在する。そこは周辺地形からみて最も標高の高い場所で大平村～沖代平野を一望できる場所である。

1号石蓋土壌墓は周溝を切っており、10号墓は周溝が作られた後溝の中へ彫り込まれたと考えられる。また、土壌墓の頭位方向であるが4号・5号墓以外は南東方向のある1点に向け集まるように主軸をとっていることが注目される。

土壌の展開範囲がどこまで広がるかは推測でしかないが、周溝の形状方向から第1平場とほぼ同じ高さの鶴市神社神殿から、隣接するゲートボール場にかけてであろうか。

区画している周溝と思われる溝は、墓域と生活域を分ける性格のものであろう。また、第2平場から検出された1号壁石土壌墓は一連の10基の土壌墓と比べ一段低く離れた位置にあり、玉砂利を敷き赤色顔料は施されていない。2次調査でおこなった第3平場上では1基も土壌墓を検出しておらず、10基の上墳墓群と壁石土壌墓の関係が注目される。

また、検出された遺物については非常に少なく、副葬品として鉄器を伴う土壌墓が4基、管玉2基、土器をもつものは2基でいずれも小片である。第2平場の3号溝中より複合口縁土器が出土していることから、石蓋土壌墓や周溝に伴う土器片と時期がほぼ同一と考えられる。祭祀遺構の存在も予感させられる。出土土器から弥生終末期と考えられ、山国川対岸では同時期に展開する大平村下唐原六ヶ葉山遺跡・金呂塚遺跡などの集団墓がある。下側では下毛原丘陵の一帯を墓域と見なすように、4世紀には助野地遺跡、永添1号墳、6世紀後半～7世紀にかけては上ノ原横穴墓群、坂手前横穴墓群を営みさらに7世紀から9世紀前半に展開した永添遺跡の方墳から火葬墓などがあらわれる。坂手前遺跡の土壌墓群は、この地域で墓制が変遷し展開する過程での初期の段階に位置づけられる遺跡である。

中世の遺構について この地は坂手隈城跡と考えられる。当時西に山国川、北には沖代平野を見下ろす交通の要衝であったと考えられる。文書での初見は成恒文書の成恒穩定軍忠状（観応二年）に「酒手隈」とみられる⁽¹⁾がこれが坂手隈城とは断定はできないとはいえ可能性は高い。今回の調査では14世紀までさかのぼる遺構、遺物は確認されておらず、今後の調査の成果に期待したい。また、「天正7年正月には野仲兵庫頭が二千騎をもって城を囲む 城主藍原新左衛門が同名右近を頼んで降る・・・ 天正16年 城も破却⁽²⁾」と伝えられる。溝やその他の遺構からの出土遺物は16世紀後半に位置づけられる播磨や豊、鉢などから城の廃絶は黒田氏の入部までには、行われていたと考えられる。

また、出土遺物の中に球状を呈する土鍾が29点出土している。他にも管状土鍾は調査区内より29点出土した。管状土鍾については孔径が比較的小さく主に刺し網用に使用されたと思われる。⁽³⁾ 球状土鍾については、4号溝中～下層で出土した。孔径の最小値の平均が0.52cmで0.6cm以下は網ロープが細く、水中に沈む速度が速く、このことは刺し網や投網、建切り網に適し、小中型魚を捕獲するための道具としての土鍾と推測される。土鍾の球形は、水底の地形が石礫などの比較的多い場所と隙間をつくらずに網をかけられる利点があると考えられる。⁽⁴⁾

参考文献

- (1) 大分県文化財調査報告書第148輯『大分の中世城跡』第一集 大分県教育委員会 51 成恒穩定軍忠状
- (2) 『豊前放城誌』明治36年 熊谷克己 野衣書店
- (3) (4) 香川県立高松高校長眞鍋行教諭からご教示をいただいた。

写真図版



中津平野 豊前海を臨む



1次調査遺跡全景



1号石盖土坟墓



1号土坟墓



2号土坟墓



3号土坟墓



4号土坟墓



5号土坟墓



6号土坟墓



8号土坟墓



9号土壙墓



10号土壙墓



壁石土壙墓



1号溝



4号溝遠景



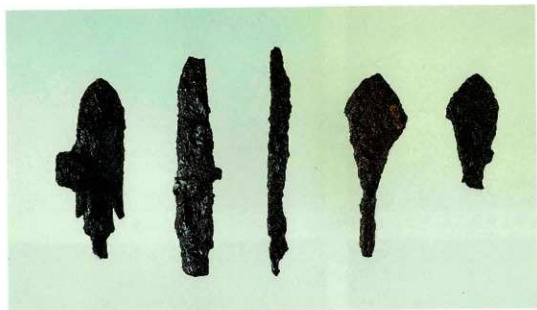
4号溝断面



敷石遺構



第3平場作業風景



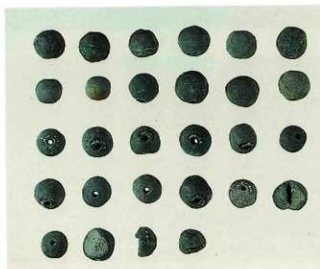
4号沟出土遗物



3号沟出土遗物



4号沟出土遗物



4号沟出土球状遗物



敷石遺構出土遺物

坂手前遺跡出土の赤色顔料分析

坂手前横穴墓群（中津市、弥生末期）より採取した赤色顔料について、大分県立歴史博物館で分析を行い顔料の同定を行った。

分析に供した資料は、横穴墓内の死骸を安置した床面から約500g採取しビニール袋に入れ持ち込まれたものである。資料数は14点、赤色の顔料が混じっているため赤色から褐色を呈していた。各資料から約1gを採り、メノウ製乳鉢で粉末としたものを分析試料とした。分析は蛍光X線分析装置とX線回析装置で行った。

資料

No.1	1号墓その1	No.6	5号墓その1	No.11	9号墓
No.2	1号墓その2	No.7	5号墓その2	No.12	10号墓
No.3	2号墓	No.8	6号墓	No.13	石蓋頭位置
No.4	3号墓	No.9	7号墓	No.14	石蓋足位置
No.5	4号墓	No.10	8号墓		

分析装置

蛍光X線分析装置（波長分散型）

フィリップス製：PW2400LS

管 球：スカンジウム管球

出 力：60Kv、40mA

検 出 器：シンチレーション検出器、ガスフロー検出器

※本装置では無試料で分析を行うと、ブランクとして、Al、Si、S、Cl、K、Caが若干検出される。

X線回析装置

島津製：XRD-6000

管 球：Cu

出 力：40Ku、30mA

表1

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
Al2O3	23	30	15	27	29	28	28	22	27	26	26	29	30	31
SiO2	51	53	28	52	56	49	49	53	55	55	58	56	55	54
Fe2O3	20	12	54	16	10	18	19	20	13	13	10	11	10	10
HgO	<<		<<	<<		<<	<<		<<	<<	<<			

<<：1%以下

表2

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
SiO ₂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Fe ₂ O ₃	○		○	○		○	○	○						

○：同定

表1は、蛍光X線装置で分析し、それを簡易定量した概数である。標準試料等を使って得た定量値ではない。表2はX線回析装置での分析結果である。

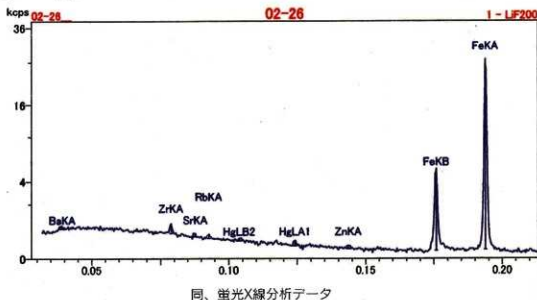
本遺跡の造営時期から判断して、赤色顔料はベンガラ（Fe₂O₃）と水銀朱（Hg₂S）の2種が考えられる。

表1では、全試料でアルミニウム (Al) やケイ素 (Si) など、土に由来する成分を多く検出している。鉄 (Fe) は上に普通に含まれる成分であるが、分析値は総じて高い。水銀 (Hg) は上に含まれることはほとんどないが、8 試料で微量であるが検出している。

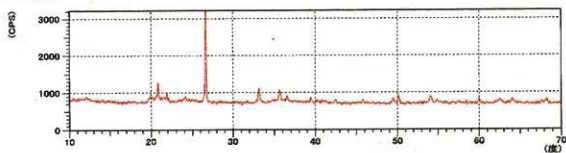
表2では、石英 (SiO₂) を全試料で同定している。これは土に普通に含まれる成分である。ベンガラを6 試料で同定している。今回使用したX線回析装置は、分解能が低く、出力が弱い。それでベンガラや水銀朱が少量の場合、同定が難しくなる。

結論として、試料No.1・3・4・6・7・9・10・11に水銀朱が微量含まれ、ベンガラを同定した6 試料以外にもベンガラが含まれることもある。

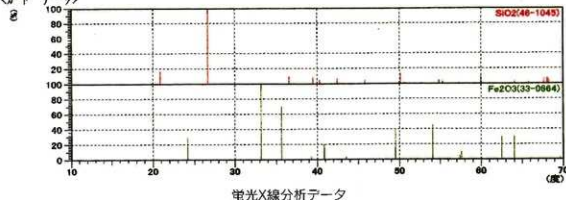
1号室 その1 試料



<プロファイル>



<オートデータ>



縄張りから見た坂手隈城

通称「坂手隈城」は、現在の犬分県と福岡県の県境を流れる山国川に接する洪積台地上の北西の角部に位置し、城跡には「八幡鶴市神社」が鎮座している。神社本殿等の施設により、旧状をどめない部分もあるが、周辺部は良く残り、概ね中世の城の縄張りを復元することは可能である。

伝承では「藍原氏が築き、代々居城した」とされ、天文から天正期の当主の名前も伝わるが、当該期文書では確認することができない。

城の西側は、山国川の浸食と眼下の岡道によって急崖となっており、中世当時の崖面がどの程度西側にあったかはわからないが、以前の国道建設工事により古墳時代の横穴墓が確認されたことからすれば、そう大きくは張り出していたとは考えられない。北側は比高差20mほどのかなり急な段丘崖となっており、南側、および東側は城跡とほとんど比高差の無い広大な台地が広がっている。

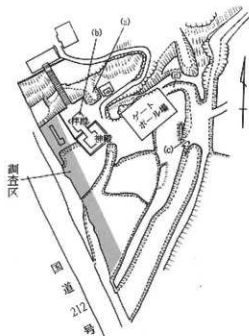
城は、台地の角部を幅10～13mの堀（外堀）で三角形に画されている。外堀はやや湾曲しながら伸びて、現在はほとんど埋まって数十cmほどしかないが、北側で2本に別れ堅堀となる。内側には土塁を有する。さらに、神社本殿の南側に幅5mほどの堀（内堀）が伸び、現在は神殿によって埋まっているが、さらに北に伸びて北側崖に一部残る堀跡（a）とつながっていたと考えられる。すなわち、最も標高の高い本殿西側の主郭と考えられる部分（b）を二重の堀で囲む縄張りを復元できる。

主郭部は南側に一部道状の張り出しを有するが明瞭ではない。北側には一段の腰曲輪を、南側には第2の曲輪を設けている。内堀と外堀に挟まれた部分には3段の広い曲輪がある。それぞれは数十cmの段差を有し、上段の曲輪から伸びる土塁が外堀との間に設けられている。

虎口部は（c）と考えられ、北側の堅堀を登ってきて、堀が一段深くなる手前で斜めに斜面を登ることになる。登りついた所には低平な土塁が認められ、斜面を登ってくる敵に対して横矢が掛けられるようになっているが、単純な平入りの虎口である。なお、（d）は新しい堀削である。

このように、大規模な横堀で画され、さらに内堀を有し、2重の堀で主郭を守る縄張りは大分県城では類例に乏しいが、思想的には近世城郭につながるところがあるものの、虎口の工夫が少なく、天正15年に秀吉から豊前6郡を与えられた黒田氏が入部した時期まで下ることはなからう。

（小柳和宏）



坂手隈城 縄張り図

報告書抄録

フリガナ	サカテマエイセキ
書名	坂手前遺跡
副書名	国道212号交通安全事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財報告書
シリーズ番号	第158輯
編著者名	井川泰成
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分市府内町3丁目10番1号 〒870-1113 大分市大字中判田ビワノ門1977番地 大分県文化財資料室
発行年月日	2003年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
坂手前遺跡	中津市 大字相原	44203	101058	33°	131°	平成13年7月24日 ～ 平成13年9月19日	500m ²	歩道設置
				33'	11'	平成13年12月17日 ～ 平成14年2月15日		
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
墳墓 城跡	弥生～古墳・ 中世	溝3条 土塚墓11基 堀1条 石組遺構		鉄器 弥生土器 上錘 中近世土器など				

坂手前遺跡

国道212号交通安全事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年3月31日

発行／大分県教育委員会
印刷／立川印刷株式会社

